様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３７１０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０５４５

研究課題名（和文）幼児・児童における「身体感覚への捉え方」と共感性の発達に関する研究

研究課題名（英文）The relationship between physical awareness and empathy in preschool and elementary school children

研究代表者
井上　久美子（INOUE, Kumiko）

西南学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：５０４３５１５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、幼児及び児童の身体感覚への意識性と共感性の関連を検討することであった。その結果、幼児においては、身体の感じに気づき、身体の状態の変化を正確に表現できることと共感的応答との関連が窺えた。児童においては、小学4年生及び6年生において、身体のありのままの感覚を感じられることが、共感的関心や視点取得といった共感性と関連する可能性が示された。したがって、幼児期から児童期にかけての時期においても、豊かな身体感覚への気づきを促すことが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the relationship between physical awareness and empathy in preschool and elementary school children. The results indicated that the preschool children who could express their physical senses through performing the relaxation task tended to present empathic responses. Moreover, the elementary school children who could recognize their real physical senses through performing the relaxation task showed higher empathic concern and perspective taking. Therefore, facilitating physical awareness in preschool and elementary school children was found to be meaningful.

研究分野：社会科学

キーワード：幼児　児童　身体感覚への捉え方　共感性

１．研究開始当初の背景

私たちの心理的発達は誕生時から身体性の発達と密接に関わっている。乳児にとって、心地よい感覚的な体験によって得られる身体感覚の出現は、自分を理解し、他者や対象との関係を育むための手段となる（Poole,C.,2006)。例えば、発語前の乳児は、自分の身体を動かし、そこに母親などの周りを取り巻く養育者から情緒的な応答を受けながら、自分の運動に伴う身体感覚で周りの世界の事柄を把握し、「身体運動感覚」を育み、言葉が誕生していく（村田,2009)。また、幼児においては、身体運動感覚を伴うやりとりによって共起した経験を手がかりにすることで、他者の情動や心的状態を情動的に理解しやすくなる(宮里ら,2010)。このように、様々な情動状態が異なる身体の動きや姿勢によって引き起こされるように、身体感覚の活性化は特定の状態や心的状態と結びつき(Evans,2001/2005)、周りの世界を理解する一助となり、特に他者の情動を理解するための基盤にもなっていく。例えば、波平(2005)は、私たちの「共感」と呼ばれるものの最も根源的なものには、必ず身体が介在しており、身体を介した過去の体験を下敷きにしていると述べている。つまり、他者と言葉や動作を介し身体感覚を伴うやりとりを重ねていく中で、相手が体験しているであろう感情に伴う身体感覚を自分の過去経験から想像できるようになり、相手の感情を推測し共感する。このように、身体感覚を適度に感じられることは自己・他者の情動理解に寄与する大事な一側面であると考えられる。

しかし、知性に重きが置かれる現代、私たちの日々の生活は“「身体を生き」損なっていることが多く、そのためにストレスがたまっている(河合,2000)”傾向にあると言える。斎藤（2000）は、今の私たちの生活では、身体の中心感覚あるいは中心軸の感覚が喪失されてきていると述べ、また、野田(2012)も、都市化が進み生活の利便性が高まる昨今、子どもたちの身体的な体験が不足し、感覚的な発育が十分になされていないことを指摘している。このように、身体への意識のあり方の変化が指摘されている現在において、子ども達にとっての身体意識性を捉えることは重要な課題の一つであると言えよう。

そこで、本研究では、幼児期から児童期にかけての身体意識性と共感性の関連について検討することを目的とする。特に本研究では、身体意識性を「注意の集中もしくは動作を遂行するといった身体に働きかける過程における身体への気づき」と独自に定義する。幼児や児童が動作課題の遂行に伴う身体感覚をどのように意識化するのか、その身体意識性のあり方と、共感性との関連について、その発達過程を検討する。

２．研究の目的

本研究では、以下の２点について明らかにする。

第一に、幼児期における身体意識性と共感性の発達との関連について検討する。関連して、大学生との比較を通して、幼児の身体意識性について発達的示唆を得る。

第二に、児童期における身体意識性と共感性の発達との関連について検討する。

以上の検討を通して、幼児期から児童期にかけての身体意識性と共感性の発達を捉える。

３．研究の方法

（１）幼児の身体意識性と共感性との関連についての検討

対象児:年長児 19 名（男児 9 名, 女児 10 名）であった。

手続き：対象児と実験者の 2 名で以下の手続きを行なった。

① 身体意識性の評定：

・動作課題：導入課題（「握りこぶしぎゅっぎゅっ」等）を行った後、肩上げ課題を行った。最初に一人で肩上げ課題を行ってもらい、次に援助者が援助をして行った後で、再度一人で肩上げ課題を行ってもらった。

・課題後の気持ちに関する質問：身体感覚と密接に繋がると考えられた言葉「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」「イライラ」「ドキドキ」を表す表情カードを用いながら質問した。

・身体部位に関する質問：表情カードで選んだ言葉について、「○○　（例；すっきり）したのは身体のどこの部分かな」と身体部位を尋ねた。

②共感的行動の評定　：

・「絵本」課題

井上・西澤(1993)を参考に、母と子の材料絵本を見てもらいながらお話を聞いてもらい、絵の中の登場人物の喜び場面(場面 1)及び困り場面(場面 2)で絵の展開を止め、母親の反応及び感情状態について表情カードを用いながら尋ねた。

・「ごっこ遊び」課題

材料絵本と同じ場面をごっこ遊びで再現した。対象児に母親役（または父親役）を取ってもらい、実験者が子ども役になって、材料絵本と同じ場面（喜び場面と困り場面）を再現し、母親役（または父親役）としてどのように応じるかを評定した。

（２）幼児と大学生の身体意識性の違いについての検討

対象者:大学生 15 名（男性 4 名、女性 11 名）であり、全員が動作法未経験であった。1～4 名の集団形式で行った。

手続き：最初に一人で肩上げ課題を行ってもらい、次に、ペアを組み、動作者、援助者に分かれ、肩上げ課題を役割を交代しながら行った。最後に、再度一人での肩上げ課題を行った。

質問紙：身体の状態及び変化を感じた身体部位について以下の項目を尋ねた。

・動作体験後の身体の状態についての質問：「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」「イライラ」「ドキドキ」の5つの中から回答を求めた。
・身体部位についての質問：回答した身体の状態について、「○○（例；すっきり）したのは、特に身体のどこの部分ですか」と身体部位を尋ねた。その他、動作体験後の身体や気分の状態について気づくことを自由記述にて求めた。

（3）児童の身体意識性と共感性との関連についての検討
対象児：小学2年生98名(男子43名、女子55名)、4年生85名(男子39名、女子46名)、6年生87名(男子38名、女子49名)の計270名であった。
① 身体意識性の評定：
・動作課題：最初に一人で肩上げ課題を行ってもらい、次に、ペアを組み、動作者、援助者に分かれ、皆で一斉に肩上げ課題を役割を交代しながら行った。最後に、再度一人での肩上げ課題を行った。
・質問紙：(2年生) 肩上げ課題を通して、変化を感じた身体部位、気持ちよさの程度、身体が軽くなったと感じた程度を質問紙により尋ねた。
(4年生,6年生) 思春期用動作自体感尺度(小澤,2010)の全9項目を用いた。
上記の質問のほかに、全学年とも、肩上げ課題を通しての感想について自由記述を求めた。

②共感性の評定：
・質問紙：(2年生) 井上・西澤(1993)を参考に親子の情動喚起場面(子どもが喜ぶ場面：1場面，子どもが困る場面：2場面)を質問紙により作成し、各場面で登場人物(母親)が子どもに何と言うか母親の立場から回答してもらった。
(4年生,6年生) 児童用多次元共感性尺度(長谷川ら,2009)のうち、「視点取得」、「共感的関心」の2因子を用いた。「視点取得」は、日常生活で自発的に他者の心理的観点を取る傾向性、「共感的関心」は、他者への思いやりの他者志向的感情を表すものであった。

4．研究成果

（1）幼児の身体意識性と共感性の関連
①幼児の身体意識性について
本課題後に予想される体験は力を抜くことに伴う感覚（爽快感「すっきり」や安心感「ほっ」、脱力感「ぼーっ」）である。肩上げ課題後、これらの表情カード（「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」）を選んだ幼児は17名(89%)であった(表1)。

表1 肩の上げ下げ後の身体の状態に関する回答人数

すっきり	ほっ	ぼーっ	イライラ	ドキドキ	合計
12	3	2	0	2	19

次に、表情カードで選んだ言葉を感じた身体部位について検討した。本課題の遂行により期待される回答は「肩」であった。肩部位と回答できた幼児は9名(47%)であった。本研究では、肩周りのリラクセイションを適切に表現できた場合を身体意識性が高いと捉え、①情動体験の適切性（「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」のいずれかのカードを選んだ者）及び②身体部位の特定化（肩と特定化できた者）の両方に正答できた対象児を身体意識性の高群として評定した。その結果、高群に該当した者は9名(47%)であり、男児2名(全男児中22%)、女児7名(全女児中70%)であった。田中(2006)は、5歳児におけるボディイメージの違いについて検討した中で，男児よりも女児の方が身体部位の認知が高いことを示しているが、本研究においても類似した結果が見られた。

②幼児の身体意識性と共感的応答との関連
「ごっこ遊び」課題における幼児の応答内容について、心理学を専攻する大学院生1名と筆者1名とで、全回答について共感性の程度の評定を行った。採点基準は、井上・西澤(1993)による基準を用い、共感の程度に応じて5点満点で評定した。課題後の情動体験が適切であり、身体部位を正確に特定化できたと評定された身体意識性の高群(9名)とそれ以外の群(10名)とで、「ごっこ遊び」課題における共感性得点について t 検定を行った。その結果、身体意識性の高群がそれ以外の群よりも有意に共感性得点が高かった($t(9.16)=-3.23$)。すなわち、幼児において身体の感じに気づき、身体の状態の変化を正確に表現することができることは共感的応答を行うことができることと関連している可能性が窺えた。

（2）幼児と大学生の身体意識性の違い
大学生、幼児(19名)それぞれにおいて、「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」のいずれかを選んだ者とそれ以外の言葉を選んだ者に人数の偏りが見られるか、二項検定を行った。その結果、大学生及び幼児ともに有意な偏りが見られた(大学生;$p=0.000$，幼児;$p=0.001$；両側検定)。すなわち、大学生及び幼児ともに，肩上げ課題を通して弛緩感が体験されている様子が窺えた。
本課題後に期待される体験は「肩周り」の弛緩体験であった。幼児の「分からない」という回答を除き、大学生、幼児それぞれにおいて、肩部位と回答した者と、肩以外（頭・お腹・膝）と回答した者に人数の偏りが見られるかについて、二項検定を行った。その結果、大学生においては有意な偏りが見られたが、幼児においては有意な偏りが見られなかった(大学生;$p=0.035$，幼児；$p=0.804$；両側検定)。つまり、大学生では、弛緩感が体験された身体部位を肩と答えた者が多く見られたが、幼児においては、弛緩体験に伴い意

識化された身体部位にばらつきが見られ、大学生のように共通して見られなかった。

幼児においては、大学生のように弛緩体験が起こった身体部位を明確に表現することが難しい様子が窺えた。

（３）児童の身体意識性と共感性の関連

①児童の身体意識性について

2 年生については、課題後のリラックス感（「すっきり」「ほっ」「ぼーっ」）を選んだ者と緊張感（「ドキドキ」「イライラ」）を選んだ者とで x^2 検定を行ったところ、人数比率の差は有意であり（x^2 (1) =73.09,p<.001)、リラックス感をもった児童が多く見られた（表2)。

表2 肩の上げ下げ後の身体の状態に関する回答人数

すっきり	ほっ	ぼーっ	ドキドキ	イライラ	合計
49	26	18	2	3	98

4 年生・6 年生について、動作自体感尺度の各因子得点を従属変数として、学年（2）×性別（2）の 2 要因分散分析を行った。

その結果、「弛緩感・爽快感」において、性別による主効果が有意傾向であった（F(1,168)=3.39,p<.10)。女児の方が男児よりも肩上げ課題を体験することによって、“すっきりした感じ”や“力が抜けた感じ”といった「弛緩感・爽快感」がより体験されていた傾向が窺えた(図 1)。

「動作への気づき」、「不快感」に関しては、学年、性別ともに主効果、交互作用とも有意差は見られなかった。

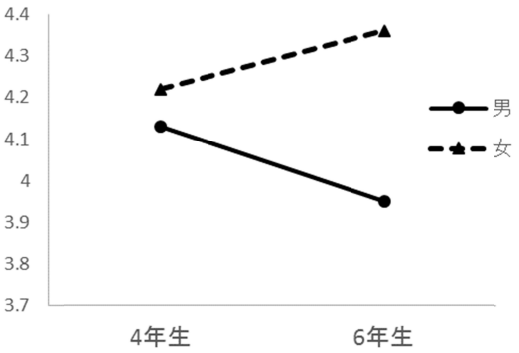

図1　学年・性別による
「弛緩感・爽快感」因子得点の平均

②身体意識性と共感性の関連について

心理学を専攻する大学院生 1 名と筆者 1 名とで、2 年生の回答について共感性の程度の評定を行った。採点基準は、井上・西澤(1993)による基準を用い、共感の程度に応じて 5 点満点で評定した。

情動喚起 3 場面の合計点を共感性得点とし、肩上げ課題が“気もちよかったと感じた群”と“そう感じなかった群”、“身体が軽くなったと感じた群”と“そう感じなかった群”のそれぞれで共感性得点の比較を行った。その結果、どちらにおいても 2 群間に有意差は見られなかった(順に t(26.06)=.69,n.s.；t(90)=.04,n.s.)。

4 年生、6 年生については、動作自体感尺度の各因子で平均値により高群・低群に分け、児童用多次元共感性尺度の「視点取得」得点、「共感的関心」得点について比較検討を行った。その結果、4 年生では、「弛緩感・爽快感」の低群が高群よりも「視点取得」得点、「共感的関心」得点ともに高かった。「動作への気づき」は、低群が高群よりも「視点取得」得点、「共感的関心」得点ともに高かった。「不快感」については、高群が低群よりも「視点取得」得点が高かった(表 3)。

表3「動作自体感尺度」の各因子における「視点取得」、「共感的関心」の得点の平均(標準偏差)（4年生）

	弛緩感・爽快感			動作への気づき			不快感		
	低群 N=32	高群 N=53	t値	低群 N=36	高群 N=49	t値	低群 N=50	高群 N=35	t値
視点取得	2.49(.84)	2.05(.62)	2.59 *	2.54(.80)	1.98(.60)	3.59 **	2.07(.66)	2.43(.80)	-2.23 *
共感的関心	2.65(.86)	2.19(.74)	2.62 *	2.67(.79)	2.14(.76)	3.17 **	2.28(.73)	2.49(.91)	-1.19

** p<.01, *p<.05

6 年生についても、「弛緩感・爽快感」の低群が高群よりも「視点取得」得点、「共感的関心」得点ともに高かった。「動作への気づき」は、低群が高群よりも「視点取得」得点のみで高かった。「不快感」については、高群が低群より「視点取得」得点のみ高い傾向にあった(表 4)。

表4「動作自体感尺度」の各因子における「視点取得」、「共感的関心」の得点の平均(標準偏差)（6年生）

	弛緩感・爽快感			動作への気づき			不快感		
	低群 N=35	高群 N=52	t値	低群 N=34	高群 N=53	t値	低群 N=44	高群 N=43	t値
視点取得	2.35(.45)	2.03(.57)	2.83 **	2.39(.55)	2.01(.49)	3.34 **	2.06(.52)	2.26(.56)	-1.76 +
共感的関心	2.55(.64)	2.11(.67)	3.07 **	2.42(.73)	2.21(.66)	1.36	2.18(.68)	2.40(.69)	-1.50

** p<.01, +p<.10

以上の結果から、肩上げ課題の遂行を通して「弛緩感・爽快感」や「動作への気づき」といった快の身体感覚を強く体験できることよりも、不快な感覚をも含めた身体のありのままの感覚を感じられることが、共感的関心や視点取得といった共感性と関連する可能性が示された。

(４)幼児期から児童期にかけての身体意識性と共感性との関連

以上の研究結果から、幼児期及び児童期において身体への意識性と共感性との関連が見られ、幼児においては、身体の感じに気づき、身体の状態の変化を正確に理解することと共感的応答との関連性が窺えた。児童においては、小学 4 年生及び 6 年生において、身体のありのままの感覚を感じられることが、共感的関心や視点取得といった共感性と関連する可能性が示された。したがって、幼児期から児童期にかけての時期においても、豊かな身体感覚への気づきを促すことが重要であることが示唆された。

（５）今後の課題

本研究では、幼児期及び児童期における身体意識性と共感性との関連について検討したが、身体意識性の捉え方について課題が残った。特に、幼児や小学校低学年の児童において、身体意識性をどのように捉えていくか、今後さらに工夫していく必要がある。また、

今回は身体意識性を捉えるため、一回のみの実践となったが、今後は継続的に身体感覚への気づきを促すことで、幼児及び児童の共感性の育みにどのように寄与できるか発達臨床的知見から検討する必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 井上久美子、動作課題遂行プロセスにおける身体感覚・情動体験の変容過程、西南学院大学人間科学論集、査読無、9 巻 2 号、2014、131-147.

〔学会発表〕（計４件）

① 井上久美子、幼児の身体意識性と共感性の関連について、日本発達心理学会、2013 年 3 月 16 日、京都大学
② 井上久美子、リラクセイション課題における身体への意識について−大学生と幼児との比較を通して−、日本リハビリテイション心理学会、2013 年 11 月 29 日、ホテルメトロポリタン盛岡
③ 井上久美子、幼児における「絵本課題」場面と「ごっこ遊び課題」場面における共感的応答の違いについて、西日本心理劇学会、2014 年 3 月 2 日、鹿児島大学
④ 井上久美子、児童の身体意識性と共感性の関連について、日本発達心理学会、2015 年 3 月 21 日、東京大学

６．研究組織

(1)研究代表者

井上 久美子（INOUE, Kumiko）
西南学院大学　人間科学部　准教授
研究者番号：50435153